宗源寺開基碑

［登録年月日］平成一五年三月一二日
［種別］有形文化財（歴史資料）
［名称］宗源寺開基碑
［点数］一基
［所有者等］宗源寺
［所在地等］下高井戸四―一―三

有形文化財（歴史資料）

宗源寺開基碑

この石碑は大正五年（一九一六）一二月に宗源寺の檀家である吉田甚五郎によって建てられたもので、高さ二八七㎝の棹石（安山岩）、高さ七〇㎝の台石（玄武岩）の自然石板型である。碑の彫りは浅く、裏面は荒削りのままである。

宗源寺は、寺伝によると、はじめは宗源庵と称して現在地に創建されたが、正保年中（一六四四～一六四八）に房州小湊誕生寺の末寺となり、その際に庵号を廃して宗源寺と改めたという。本碑は宗源寺の由来について、同寺の檀家である志賀重昂が下高井戸の旧家である吉田氏に伝わる伝承をもとに撰文したものである。

志賀重昂（文久三年〈一八六三〉～昭和二年〈一九二七〉）は、明治・大正時代に活躍した思想家、地理学者で、『南洋時事』（一八八七年）、『日本風景論』（一八九四年）等で知られている。彼の地理学に関する多数の著述は、各地への旅行・実地踏査の記述が精彩ある叙述と相まって多くの読者をひきつけ、特に『日本風景論』は日本の景観に対する新しい見方を社会に広めた。

宗源寺の開基は、伝承によると吉田氏の一族で、宗源寺の名は吉田氏の祖の法名「宗源」による。吉田氏は元来武士であったが、武蔵野に移り住み、高井戸の地に土着して農民となったという。

本碑は宗源寺の歴史の一端を示すものであり、また、碑の識文が思想家、地理学者として名前を残した志賀重昂によるものであり重要である。

【文化財所在地】